



ねぎの栽培管理について 病害虫対策と高温対策

安定したねぎの収穫に向けて、夏から秋にかけて発生が懸念される病害虫や高温対策のポイントについてまとめましたので、参考にしてください。

① ネギネクロバネキノコバエ

・ 幼虫がねぎの茎盤部や葉鞘部に寄生し集団で食害します。地上部に症状は出にくいのですが、食害が激しくなると外葉が枯れ、生育が悪くなりま

す。
・ 発生は気温の低下する9月以降ですが、幼虫がいる地中深くの茎盤部まで農薬を届かせるために、土寄せ前に防除を開始しましょう。

・ 生育不良株がある場合には、株を抜き取り、茎盤部等に害虫がいないか確認しましょう。

② 黒腐菌核病

・ 外葉が黄化し、葉鞘部に白いかびを生じたあと、黒変・腐敗します。

・ 発生は平均気温が20℃を下回る秋から春にかけてですが、

農薬による防除は土寄せ前の9月頃から行いましょう。過去の栽培において本病が発生した場合は、耕種の防除や土壌消毒による防除を組み合わせ、総合的な防除を行いましょう。

③ シロイチモジヨトウ

・ 症状の特徴が幼虫の生育ステージによって異なります。若齢幼虫では白い表皮だけになって折れ、草丈が短くなり被害が目立ちます。老齢幼虫では葉に穴をあけ、途中で葉身を食い切り、外部に出てきて摂食します。

・ 主に7月から発生し、8〜9月頃に被害が激しくなります。葉の内部に食入する生態的特性を持つため、散布農薬による防除効果が低い害虫です。そのため、薬剤散布は高い防除効果が期待できる若齢幼虫の間に行いましょう。表皮を残し白くなった葉身が見られたら速やかに防除しましょう。薬剤の効果が切れると再発生

するおそれがあるので、発生状況を確認し必要に応じて防除をしましょう。



写真：シロイチモジヨトウ
幼虫による食害

④ 高温対策

・ 土寄せは、断根を伴う作業です。盛夏に行うとねぎが弱り、病気や欠株につながるため、避けましょう。

・ 株元の滞水を防ぐため、定植溝は、可能な限り埋め戻しを行うとともに、明きよや排水溝を点検し、ほ場の滞水を防ぎましょう。

近年、気候が大きく変動し、病害虫の発生を予測し辛くなっています。天候不順に対応できるように、土づくり、予防中心の体系防除及び天候に応じた臨機応変な管理が重要です。

以上の対策を組み合わせ定生産に取り組みしましょう。

お知らせ

近年、カメムシ類による水稲の被害が増大しています！



埼玉県マスコット「コバトン」

7月	8月	9月
草刈を避ける期間		

水稲の収穫量と品質に影響を与えるカメムシ類は、河川等の雑草で越冬しています。稲穂が出る時期に河川等の草刈りを行うと、より多くのカメムシ類を水田に呼び込むことになってしまいます。このため、その期間における河川等の草刈りを極力避ける取組を実施しています。

草刈り時期をずらすことで、例年より雑草が繁茂する可能性があります。ご理解とご協力をお願いいたします。